會　　報

第26回大日本耳鼻咽喉科會中國地方會記事

幹事　小田大吉記

昭和9年3月4日午後2時より岡山醫科大學第一講堂に於て第26回地方會開催．演說次の如し．

1. 上顎竇炎性敗血症の1例

石井研二君

演者は上顎竇試驗穿刺に續發せし上顎竇炎性敗血症の1例こ就て述べたり．卽ち61歳の男子　數來感冒に罹る度毎に兩側殊に左側の鼻漏鼻閉塞を來たせしが，昭和8年5月頃より，感冒に次で左鼻漏鼻閉塞頭痛を來たし，5月15日專門醫を訪ひ，左上顎竇炎の疑ひの下に試驗穿刺を受けたり．其の際穿刺困難にして激痛ありしが，其の後3日にして38度5分の發熱，左頰部の腫脹壓痛及び前額部の重感を來たし，其の後多少發熱輕度となりしも，6月5日に至り惡寒戰慄を以て39度に發熱し，再び左側顏面及び左側頸部に腫脹と疼痛を來たせしを以て6日岡山醫科大學耳鼻咽喉科外來を訪ふ．當時苦悶の表情を示し，舌乾燥し，仰臥す．顏面は一般に少しく腫脹し殊に左側に於ては上眼瞼，眼窩下部の腫脹は强く，眼窩部には波動を觸れ，又前額部及び頰部には壓痛あり．鼻鏡檢査所見．左中鼻道には其の上端より下垂し中鼻道全體を充たせる濃厚，惡臭ある膿汁を見る．左鼻腔粘膜は一般に發赤腫脹せり．演者は之に對して既往症局所並に全身所見よりして急性上顎竇炎のみならず敗血症の合併に疑を置き，局所的療法を加ふると共に血液培養を試みしに，果して連鎖狀球菌を證明し，敗血症の合症を確認せしが之に對して「トリパフラヴイン」リンゲル，ロツク氏液注射，輸血を試みしが，體溫38度を下らず，衰弱漸次加はり脾及び肝臟腫脹，黃疸を來たし，遂に6月18日死亡せり．演者は上顎竇穿刺によつて先づ急性上顎骨骨髓炎を起し遂に敗血症を合併せしものならんと推定し，上顎竇穿刺に因る合併症としては稀なれども臨牀上注意す可しと述べたり．

2. 全身皮膚並に淋巴腺に轉移を發生せし鼻腔肉腫樣癌腫の1例

上塚萬壽男君

71歳の女．昨年10月末より血液を混じたる兩側鼻漏，夫れより約半月後より兩側鼻閉塞を來たし夫れより約20日遲れて左顱頂部，左下眼窩部に腫脹を生じたりとて12月6日岡山醫科大學耳鼻咽喉科敎室外來を訪ふ．左側鼻根部，左下眼窩部稍々腫脹し，左眼に輕き眼球突出あり．鼻腔內には左中鼻道より中甲介の存在する部分にかけて褐色，表面不平の出血し易き腫脹あり，後鼻孔も同樣の腫瘍塊を以て充たさる．Röntgen寫眞に於ても左篩骨蜂窩及び鼻腔上部に暗影を認む．尙ほ前頭部，顱頂部，左顎下部，右鼠蹊部に轉移を認む．中鼻道よりの試驗剔出の材料の組織的所見は圓形細胞肉腫の像を呈す．之に對して放射線療法の方針をとり原發竈には「ラヂウム」針を，轉移にはCoutardの分割遲延照射を試みしに，原發竈轉移共に速に消失せしむ其の後次々Douglas氏窩，前頭部，後頭部，顱頂部，肩胛部，腋窩部，下腹部，鼠蹊部の皮膚及び淋巴腺，左肺炎部に轉移を生じ

一般狀態又漸次侵されて2月6日遂に死亡せり．演者は，本例は鼻腔腫瘍にして全身に多數の轉移を來たせしは文獻に徵するも稀なること及び組織的所見は最初圓形細胞肉腫と考へられ，臨牀的所見並に經過，放射線に對する態度等よりしても肉腫と考へられしも，病理學教室に於て肉腫樣癌腫（肉腫に酷似すれども腫瘍組織內に腺管の存在を認むる點よりして癌腫と認む可きものなりと）と診斷せられたることを注意せり．

3. 扁桃腺周圍炎を來たせる咽頭實扶的里の1例

尾崎嚴衛君

21歲の小學校女教員．2日前より嚥下痛，惡寒戰慄を伴ふ發熱，睡眠障礙あり．檢するに右側下顎角を中心とせる頸部及び顎下淋巴腺ノ瀰蔓性腫脹の壓痛あり．右側口蓋扁桃腺より同側軟口蓋にかけて發赤，腫脹著しく，其の表面は白色の義膜を被る．左側口蓋扁桃腺も發赤し，2，3の黃白色の栓子附着す．軟口蓋腫脹部に於て試驗穿刺を行ふも膿を證明せず．細菌檢査により實扶的里菌を認む．血淸療法を施し臨牀的所見全く去りしが，其の後も尙ほ咽頭粘膜より實扶的里菌を證ずるを以て扁桃腺剔出術を施し全治せしめ得たり．演者は本例に於て咽頭實扶的里にして扁桃腺周圍炎を來たし居りしこと並に實扶的里病變が1側に現れしことを注意し，其の主として右側を冒したるは1年前同側扁桃腺周圍膿瘍に罹患せしことあり，爲に扁桃腺乃至被膜組織に病變ありしに因るものならんとなし，又本例の如く咽頭實扶的里にして扁桃腺周圍炎を來たすことは，文獻に徵するも稀なれども臨牀上注意す可きものなるを指摘せり．

4. 右側聲唇より發生せる腫瘍の1例

小田醇太郎君

演者は右側聲唇より發生せる，恐らくは粘液纖維腫の肉腫變性を來たせるに非ずやと思惟せらるる1喉頭腫瘍例に就て述べたり．32歲の女．6年前より存在せる輕微なる聲音嗄嗄昨年10月以來急激に增惡せりとて今年1月12日兵庫縣立神戶病院耳鼻咽喉科外來を訪ふ．當時聲門前連合より右側聲唇前1/3に亙る部分の氣管側面に小豆大，卵圓形淡赤色表面平滑なる有莖性の腫瘍あり．之が精査摘出の要あるを告げしも，患者之を肯んぜざりしに其の後聲音嗄嗄增惡，2月始めよりは呼吸困難を加へしを以て再び來院せり．其の間僅か1箇月の經過に過ぎざるも腫瘍は著しく增大し小指頭大となり殆ど聲門を充す．以上の諸點殊に進行の速なる點よりして惡性腫瘍を疑ひ試驗切除を行ひしに其の材料は纖維腫の像なりしが更に喉頭內手術に據り可及的腫瘍を剔出して檢査せしに大部分は粘液纖維腫と認む可き所見を有するも其の一部に肉腫變性を思はしむる所見あり．之は臨牀的經過より疑を置きし所に一致するものにして，近く喉頭截開術により剔出を試みる豫定なり．演者は喉頭に於ける粘液纖維腫の報告少なきを以て報告せしものなり．

5. 巨大なる「ラヌラ」の1例

安原功君

患者は頤下部より前額部に亙る大なる囊腫を有する16歲の少女．10歲の頃，最初口腔底の舌下腺の部位漸次腫脹し來たりし爲め此部に切開を受け其の後之は消失せしも其の後主として頤下部の腫脹を來たし，之に切開を受け其の內容を排出せしも反覆腫脹し來たり爾來腫脹せる每に切開を受くること10數回に及びしも治癒するに至らず，近來は頤下部より前頸部に亙つて手掌大に腫脹せり．此囊腫は周圍組織とは比較的劃然と限界され，皮膚とは癒着無く，下層組織に對しては移動性無きも頸部諸器官とは何等關係無きこと，試驗的穿

刺に據る內容物の性狀の「ラヌラ」の夫れに一致すること，殊に既往症に於て曾つて口腔底に囊腫を有せしこと等よりして，恐らくは「ラヌラ」ならんと推定し，之を剔出すると共に此囊腫と口腔底との關係を知らんと欲し顎下部より入つて囊腫を摘出せり．囊腫は側方は2腹顎筋の下方に達する大なるものなりしが之と口腔底との關係を證明し得ざりき．依て一時「ラヌラ」なる推定に動搖を感ぜしも，手術後1週間にして口腔底舌下腺部に定型的の「ラヌラ」を生じ，再び之を摘出せんが，之によつて「ラヌラ」なる診斷を確定し得たり．

6. 實扶的里性乳嘴突起炎に就て

星島忠夫君

22歳の會社員．初め滲出性中耳加答兒の像を呈し，其の所見に何等特異なる點無なりしも，其の經過餘りに頑固なりしを以て細菌檢査を行ひ，中耳實扶的里なりしことを發見せるを以て實扶的里血清を注射すること3回に及びしも好果を齎らさず，其の後乳嘴突起炎を續發し，遂にSchwarze氏手術を行ひしも尙ほ治癒に至らず，更に根治手術を改めて始めて治癒の經過を取るに至りし1例を報告し，乳嘴蜂窩內の實扶的里菌が血清に對して頑强に抵抗せし原因に關しては恐らくは乳嘴蜂窩內の循環系統に關係あるものならんと述べたり．

追　加

田中文男君

中耳實扶的里に關する報告は少けれども注意して觀察すれば一般に信ぜらるるよりも多きものなりと信ず．本例は昨年1月より經過を觀察せしものにして余の注意を惹きし點は反覆血清注射を施せしにも拘らず，注射直後は輕快するも，暫く經過すれば注射前と同樣の狀態となり，直後遂に乳嘴突起炎の症狀を現すに至り手術療法を加ふることとなせしが，其の際一面患者は他耳に高度の難聽あるを以て患側に根治手術を行はば會社員としての職業上の不便甚だしからんとの考慮並に恐らくはSchwarz氏手術を以て治癒を期待し得べしとの考への下に先づ單鑿開を行ひしが，竅室及び竅室上窩に殘りし實扶的里菌は消失し難く先日根治手術を行ふの已む無きに至れり．之によつて遠からず全治するものと思惟せらる．血清注射によつて治癒し難かりし理由に關しては恐らくは循環系統の關係によるものならずやと考へらるるも尙ほ此點に關して星島君の一層研究されんことを望む．

7. 1側迷路炎に於ける他側聽器の病變に就て

中村博郷君

實驗的迷路炎に際して他側聽器にも炎症性變化を認むること稀ならず．之が成立機轉に就て其の傳染路として或は歐氏管を，或は骨膜下をあげ，或は腦膜炎を經て波及すると言ひ，更に又交感性眼炎に一致する機轉が聽器にも行はるるものならんと言ひ其の說明區々たり．斯くの如く見解の分かるるは勿論其の成立機轉の單一ならざるを示すものならんも，又標本作製に當り，左右聽器及び頭蓋內容を個々別々に處置するが故に其の相互の關係を明瞭ならしむること困難なるも亦其の一因たる可し．演者は他の實驗の目的を以て海猪の1側中耳腔に粘液性連鎖狀球菌を注入せしに非注入側迷路症狀を呈せしもの3頭を得たるを以て，反對側迷路炎の成立機轉を追及せんと欲し，前述の考への下に，生體固定後，左右聽器及び頭蓋內容を分離することなく處理して「チエロイデイン」包埋後20μの水平連續切片を製作檢索せり．此際之等3例の海猪に於ては何れも迷路炎性腦膜炎を起しこれよりして他側の迷路並に中耳に炎症の傳達

せしものなるを認め且對照として同一處置を施せる，他側迷路炎症狀を呈せざりし，他の1例に於ても既に實驗側迷路に於ては炎症機轉は聽神經に沿ひて腦膜に迄波及せるも僅に蜘蛛膜下腔の癒着に據つて限局さるるを認めたり．演者は此際實驗例の少く且特殊の菌を用ひしものなるを以て此小實驗の成績をもつて全般を論ぜんとするものには非ざるも海濱に於ても狀況によりては容易に迷路炎性腦膜炎を惹起し得るを指摘し，且1側迷路炎の際他側迷路炎を認めたる場合には常に腦膜に對して細心の注意を拂ふ可く，斯かる際演者の述べたる聽器並に頭蓋內容を同時に檢索する方法は輕微なる炎症機轉の移行をも追及するに便なるを附言せり．

8. 口蓋扁桃腺組織內の特殊構造を有する血管に就て

松谷辰造君

口蓋扁桃腺には，曩に演者が報告したる血栓形成の外，特殊構造を有する血管が甚だ多數に存在することを認め，之が組織的檢索を行ひ，從來の報告に見ざる所見を一括して發表せり．卽ち管壁各層の特異なる肥厚，增殖及び管腔の變形等を來たせる動靜脈の多數の組織標本を「エピディアスコープ」を以て供覽說明し，更に其の成立，影響に就て論ぜり．就中之等總ての血管の異常は周圍の血行に對して容易に影響を齎らす可く，因つて來たる循環の障礙は慢性口蓋扁桃腺炎患者に屢々經驗する肩凝症と何等かの交涉を持つにあらずやと推行し，其の成立に關して一考察を試みたり．

9. 乳嘴突起腐骨の1例

藏本養三君

演者は滿2年の男兒に見たる慢性乳嘴突起炎に對して根治手術を施し，乳嘴突起部骨質は全體に亙り完全に分離せられたる腐骨となれることを發見，之を除去せり．而して其の手術創肉芽の組織的檢査及び分泌物の動物接種によつて之が結核性乳嘴突起炎なりしを確めたり．

10. 乳嘴突起炎手術後に合併せし重篤なる蜂窠織炎の1治驗例

高原滋夫君

患者は28歳の男子．海水浴の後激烈なる耳痛を伴へる右側急性中耳炎を惹起し，數日にして乳嘴突起炎に移行し發病後6日目に乳嘴蜂窠鑿開手術を行ふの止むなきに至れり．手術に當りては殊に創面よりの傳染に顧慮し嚴重なる創面庇護を施せるに拘らず，術後3日目より熱發，惡寒と共に創面下部に發赤，腫脹，自發痛を來たし明かに蜂窠織炎の發現を窺ひ得たるを以て直ちに同部皮下に切開を加へ，「リバノール」濕布を施せしも炎衝は急激に，右側頸部より兩肩胸部兩上に肢順次進行し患者の衰弱日々加はりは一時殆ど絕望の狀態に陷りしものに對して，16日間に前後を通じ9回の切開，此切開創數31箇所並に輸血7回，總量1300 cc 他適宜藥液の補助により幸に之を救ひ得たる1例の經驗を報告し，最後に斯かる激烈なる蜂窠織炎に對して未だ的確なる療法の無き今日果斷なる早期切開を反覆しての輸血は我々の賴るべき唯一の療法ならんと述べたり．

追加

田中文男君

急性乳嘴突起炎に際して早期に手術を行ふ可きや，或は之を延ばす可きやに關しては異論ある所なれども，統計上よりの事實より見れば中耳炎發病後1週間以內に手術を行ひしものは合併症を來たすこと多く，2，3週間以後に行ひしものは手術後の經過良好なり．故に出來可くんば手術は2，3

週間以後に行ひたきものなれども，症狀によりては數日乃至1週間以内に手術するの已む無きに至ることあり．斯かる際種々の合併症殊に蜂窠織炎を起すことあり，本例の如く充分注意せしにも拘らず，激烈なる蜂窠織炎を起せしは遺憾なるも，之が幸に治癒せしは果敢なる切開を加へしによるものにして，斯かる處置に就ては患者並に其の周圍の理解を必要とするも，幸に此例に於ては患者は醫師にして其の家族友人にも理解あり余の信ずる所を行ひ得たるものなり．斯かる例は公開の席に於て述べ以て一般の理解を高むるの資となし度し．

11. 「サルヴアルサンアグラヌロチトーゼ」に就て

岡　崎　衛　生　君

演者は最近岡山醫科大學耳鼻咽喉科臨牀に於て口腔乾燥を主訴とせる37歳の婦人黴毒患者に，驅黴劑として「ネオサルヴアルサン」(4回，第1回は0.3g以後は0.45g，總量1.65g)使用中，最終注射後3日にして，突然惡感戰慄を伴ふ高熱の下に發來せし壞疽性扁桃腺炎に遭遇せり．血液所見は特有にして，白血球總數1100，中性嗜好白血球22%，「エオジン」嗜好白血球0%，淋巴球57.3%，大單核白血球20.7%，左側偏位著明なり．赤血球，血色素及び血小枝の障礙は輕度にして，出血性素因を缺けり．尙ほ黃疸なく，淋巴腺，肝及び脾の腫脹を缺けり．治療法として卽時「サルヴアルサン」の使用を中止すると共に，對症療法の外に主として輸血を試みたり．7日目に兩側扁桃腺は壞疽塊となりて脫落し，血液像漸次正常に復し，的3週目にして全治退院せり．

以上の所見及び經過よりして，演者は本例を所謂症候性乃至二次的「アグラヌロチトーゼ」と診斷し，其の原因を「サルヴアルサン」(砒素「ベンツオール」)注射に歸し，就中其の「ベンツオール」基に根本的意義ありと述べたり．されば本劑を以て驅黴療法を行ふに當りては，常に如斯重篤なる血液病を考慮し，適時血液檢査を行ひて時に白血球系の狀態を觀察し，若し白血球減少の傾向を示し或は發熱，咽頭痛等を伴ふことあらば，卽時其の適用を中止し又は長期間の間隔を挿入するの要あるを注意せり．

追　加

田　中　文　男　君

此例を余が一見して「サルヴアルサン」に因る「カグラヌロチトーゼ」に非ずやと思惟せしは其の病變が扁桃腺にのみ存在して周圍に及ばざること並に病歷を見るに前回「サルヴアルサン」注射後惡寒戰慄を以て39度に發熱せしにも拘らず擔當者が4回目の注射を行ひ居れることなり．演者は本症の種々の特徵を述べられしが實際に當りては注射を行ひ既に惡寒戰慄を以て發熱せしに拘らず尙ほ續けて注射をなすことは臨牀家として注意を要することと考ふ．

12. 乳嘴蜂窠構造の遺傳關係に就て

岡　崎　衛　生　君

近時乳嘴突起炎の成因としては乳嘴蜂窠の構造が根本的に意義ありと認めらるるに至れり．一面吾人日常經驗に徵するに，乳嘴突起炎の家族的發生は敢て稀ならず．されば乳嘴蜂窠の遺傳關係を追求するは臨牀上にも亦興味ある問題なり．

Wittmaack は氏の所謂病的蜂窠を乳幼兒時代の中耳炎に基くとし，之等を追求して後年得たる所見は所謂現象型に過ぎずと論ぜり．之に對し Albrecht は遺傳說を唱へて外因說に反對せり．

演者はかかる所見の缺陷に注意し，之が解決に寄與す可く，双生兒2組，家族38(所屬人員182

人）及び同胞52（所屬人員185人）を「レ」線學的に研究し，乳嘴蜂窠は外因により影響さるること少くして其の際遺傳因子が規定的なること，更に子女の蜂窠型は多く母の夫れに左右さるる傾向ありとの見解に達せり．而して其の根據となりたる「レ」線寫眞を供覽せり．

13. 一新吸引裝置供覽

吉田千束君

永島製作の一新吸引裝置を供覽せり．之は從來の「エロイザー」其の他に用ひられたる「ピストン」式を排して一種の「プロペラ」を用ひしが故に耐久力，吸引强く，雜音少く，且又吸引の外に「スプレー」麻醉等にも用ひ得ることの利點あるを紹介せり．

14. 落馬に因る鼻外傷の1例

岡　貞邦君

患者は26歳の農夫．落馬の際馬蹄に依りて外鼻孔附近を踏まれ，爲に外鼻の裂傷を來したるが其の外に兩側上顎骨に對照的に現れたる約水平に走る完全骨折，Guérin 命名に依る所謂 doppelter Transversalbruch を認め，再び之に合併して兩側上顎骨の正中線に於ける離間を來たし居れり，之に對して外鼻の裂傷には一次的縫合を施して完全に癒着せしめ得．骨折の方は骨折端間の離間輕度にして轉位無き爲め放置したるに自然に漸次癒着しつつあり．外傷を受けたる約20日後より左側上顎竇炎の症狀現る．之に對しては後日手術的操作を加ふる心算なり．

15. 過去1年間に診療せる粘液性連鎖狀球菌性中耳炎症例に於ける臨牀的觀察

小田大吉君

演者は過去1年間に診療せし粘液性連鎖狀球菌性中耳炎19例に於て臨牀的に觀察せる所を述べたり．卽ち其の期間に於て定型的なる本菌を證明せしもの19例，之は其の期間に於ける乳嘴突起炎手術例の10.9%に當る．年齡關係は最高79歳，最低16歳，其の內40歳以上16例，40歳以下3例，卽ち從來の報告に一致して高齡者に多し．臨牀的所見は1例の眞珠腫化膿を除きては總て新しく感冒に次で始まれる急性中耳炎にして，而も刺戟症狀に乏しく經過緩漫，發熱も大多數に於て殆ど無く，發熱を見る少數例も微熱に過ぎず．主訴とする所は Bezold 乳嘴突起炎のみの例と耳翼後部に腫脹を有せし5例が當部の腫脹を訴へし他は難聽耳鳴，耳閉塞感頭重感に過ぎず，重篤なる合併症を有するもの多き（橫竇周圍膿瘍8，橫竇血栓及び Bezold 乳嘴突起炎3，迷路炎2）に拘らず自覺症輕し．鼓膜所見も一般に輕微にして，發赤膨隆は輕微殊に發赤は輕微，就中4例に於ては所謂蒼白浸潤を示すに過ぎず．一見殊に正常かと思はるる所見を示し，鼓膜穿孔は眞珠腫を有せし1例及び既に鼓膜穿刺を受け居りし4例を除きては穿孔無く又耳後部の所見も大多數に於て輕し．然れども注意す可きは之等所見殊に鼓膜所見の輕微なるに反して，聽力減退の程度强かりしこと尙ほ鼓膜の所見の輕微なるに比して著明なる骨部外聽道壁下垂を見ること著しかりしことにして，斯かる一見矛盾せるかの如き相對的關係は「ムコーズス」中耳炎診斷上注意す可し．之等は總て手術的療法を要せしが，手術的所見の要點は表層の蜂窠には變化輕微なるも深部蜂窠には骨の融蝕化膿を見，骨內皮質の融解せるもの少からず，前記の合併症の存在を見しが之等に對して乳嘴蜂窠を全部除去せしに，眞珠腫化膿の1例及び迷路摘出を行ひし1例に根治手術を要せし他は總て單鑿開をのみを以て2例の死亡（腦膜炎）を除きては再手術を要す

ること無く全治せり．演者は以上を總括して，1.「ムコーズス」中耳炎の稀ならざること．2. 本症は鼓膜所見輕微にして診斷困難なることも少からざるも其の特異性を理解すれば早期診斷も左程困難ならざること．3. 自覺症輕く，而も深部に進行する傾向强き點に於て惡性の中耳炎なれども，早期に發見，蜂窠を徹底的に除去すれば左程治療困難なるものに非ざる可く，而も其の際 Schwarze の術式を以て充分なる場合少からずと述べたり．

追　加

細　見　　英 君

余も最近1箇年半の間に本症を8例經驗せり．其の內乳嘴突起炎，頭蓋內合併症の爲め手術を行ひしもの5例．其の手術前手術時の所見，自覺症は總て演者の述べられし所に一致せり．余の5例中2例は乳嘴突起炎，2例は橫竇血栓，1例は迷路炎にして其の內橫竇血栓の1例死亡せり．之等の例に於て注意す可きは患者は數醫の間を轉々し或醫師よりは既に中耳炎は治療せりとさへ告げられ居りしことにして本症は學會等に於ては既に注意さるる所なるも一般には耳科醫に於ても尙ほ理解不充分なる點少なからざるものの如く開業醫家の注意を喚起するの要ある可し．

結　辭　　演　者

演者の例に於ても耳科醫が鼓膜所見を見得，而して夫れが單に蒼白浸潤を示すに過ぎりしが故に診斷に當つて誤られしものと考へらるる既往症を有する例少からず．「ムコーズス」中耳炎の特異性に充分なる理解を深むる要ある可し．

16. 神經及び淋巴管の X 線寫眞

山　口　　治 君

1929年京都帝大舟岡敎授の神經內注射の研究，次で尾形氏の神經の「レントゲン」撮影の研究の發表あり．演者は家兎に於て尾形氏の使用せる數種の造影劑卽 Methyljodid, Äthyljodid, Golbenzol, Tatramethylbrei, Dimethylquecksilber, Lipjodol を神經內に注射して「レントゲン」寫眞の撮影を試み，尙ほ更に進んで淋巴管撮影を試みたり．其の結果 Methyljodid 毒性强くして到底使用に耐へざりしも其の他のものは比較的無害にして動物實驗使用し得るを知れり．但 Lipjodol は粘稠度甚だ强く「オレーフ」油を以て稀釋せざれば注射用となす能はず，從つて之による寫眞像は他のものに比して明瞭ならず．最近 Trotrast を用ひて實驗を試みしが神經鞘內をつたひて末梢迄達し比較的明瞭なる像を得たり．尙ほ之に關しては目下研究中なれば詳細は追つて發表す可し．

17. 10年後再發せし上顎腺樣癌腫の1例

田　中　文　男 君

鼻及び上顎の癌腫は，從來其の手術的成績あまり良ろしからざりしに，近來ストックホルムの Öhngren 敎室に於て，主として外科的「ヂアテルミー」と「ラヂューム」療法を併用せる成績の頗る可良なるは注意を要す．尙ほ鼻癌中に於ても腺癌は比較的手術の成績良好なり．

66年の男子にして10年前右鼻腔に發生せる腺癌を切除し其の後全治の狀にありたるに，昨年9月前同樣の症狀を以て來院，腺癌の發生を知り，再び之を切除せるものに就て其の病歷を述べ，この癌腫は以前の組織が殘留せるものより發生せりとは認め難く，一旦全治せるも，新しく癌腫の再發せるものとなす可きものならんと．

18. 安魏那腎臟炎に對する扁桃腺摘出の治療價値に就て

田　中　文　男 君

急性腎臟炎の最も多き原因は急性扁桃腺炎なる

ことは一般に認められ居る事實にして此際扁桃腺炎に對する療法の肝要なることも既知のことなるも，其の根本的治療たる扁桃腺摘出に就ては兎角躊躇され又は其の時期に就て意見あるを述べ，1月以來急性又は亞急性腎臓炎患者に扁桃腺摘出を試みたる5例を紹介し，これよりして急性腎臓炎患者に於ては第1に扁桃腺を檢査しこの炎症と關係ありと認めたる時，又再發性腎臓炎の場合，或は長く續ける急性腎臓炎又は慢性腎炎の急性發作等の際にも扁桃腺炎との關係ありと認めらるる場合には進んで扁桃腺摘出を行ふの可なるを述べたり．

出席者

田中文男君	掛谷令三君	山口治君	川本重雄君
細見英君	岩永勘一君	松浦三郎君	菰口武夫君
小田醇太郎君	久保一正君	佐藤信也君	安岡準三君
原田忠君	中川剛三君	井口法太郎君	高越澤太郎君
吉田千東君	福武敏重君	鵜山義治君	吉田功君
笠井經夫君	登坂清喜君	河合廉介君	松村克郎君
宇野善一君	小田大吉君	西村伊勢松君	松谷辰造君
中村博郷君	岡貞邦君	岡崎衛生君	高原滋夫君
桑原良一君	安原功君	大野勁次郎君	星島忠夫君
石井研二君	上塚萬壽男君	藏本逢三君	尾崎嚴衛君
美田隆紀君			